重修真書太閤記

九編

晴

家傳

第十

和書門
類
三四〇五三號
二二六函
一三架
四〇冊

内閣文庫
和書
類
三四〇五三號
四〇冊
一二架
一七一函

新刊納本

内閣文庫
番號 和 34053
冊數 40(11)
函號 171 45

国立公文書館
National Archives of Japan

柳莽栗原氏校訂

重修

眞書 太閤記九編

東都書肆 知新堂發兌

重修眞書太閤記第九編目録

巻之一

柴田勝家佐久間玄蕃を呼返さる事

并羽柴筑前守大垣城進發の事

巻之二

長濱の郷民筑前守を迎ふる事

并丹羽五郎左衛門尉發向の事

後藤又兵衛基次賤岳を保る事

并北國勢騒動周章の事

巻之三

国立公文書館 National Archives of Japan

羽柴筑前守賤嶽へ乘付る事
弁序破急陣螺の事
七本鎗三振刀の事
弁拜郷五左衛門退口の事

巻之四

北越の諸將難戰の事
并羽柴方七雄鎗先高名の事
佐久間兄弟賤嶽を出る事
弁加藤孫六出立美麗の事

巻之五

柴田權六勝久玄蕃を救ふ事
弁丹羽五郎左衛門尉陣中ゟ於て病氣の事
柴田權六勝久玄蕃允を諫る事
弁原彦次郎再度の軍をもくむる事

巻之六

中興武家一番鎗古實の事
弁加藤虎之助生笹指物の事
賤嶽七本鎗の面々ものがたりの事
弁盛政一人筑前守を覘ふ事

巻之七

柴田三左衛門尉討死の事
弁毛受勝助忠誠の事

柴田勝家賊嶽を退事
　并毛受勝助兄弟勇戰の事

巻之八

嶋左近毛受勝助を討事
　并前田利家柴田羽柴両将へ對面の事
後藤又兵衛尉佐久間玄蕃允柴田權六を生捕
　る事
　并北庄籠城の事

巻之九

三女子北の庄ゟ出る事
　并筒井順慶両度使節の事

勝家并ゟ小谷の御方自害の事
　并北國平均の事

巻之十

織田信孝濃州没落の事
奉若大夫の事
　并柴田乃妾佐野柴田三之助ゟ遇事

巻之十一

佐久間兄弟紀州へ落る事
　并粉川法印諸浪人を誘ふ事
鷺岡十郎兵衛贋使者の事
　并粉川法印霧坂の城を取事

国立公文書館
National Archives of Japan

巻之十二
佐久間兄弟佐太の森合戦の事
并羽柴三左衛門尉寶寺へ落る事
中川秀春霧坂先陣を望む事
并澤井正太郎水難ゑ逢事
巻之十三
霧坂城中軍評定の事
并中川秀春蜂屋塩川霧坂發向の事
大谷慶松謀て城兵を偽引出ス事
并佐久間貴崎拔掛追討の事
巻之十四
佐久間兄弟難戰危急の事
并粉川法印馬術勇猛の事
羽柴塩川霧坂ゑ入事
并佐久間兄弟粉川法印危難の事
巻之十五
大坂御城普請の事
并四大工棟梁御尋の事
織田信雄内大臣ゑ昇進の事
并四人の老臣評定の事
巻之十六
羽柴宰相秀吉卿長嶋登城の事

并近習の健士勇烈の事
北畠の老臣大坂へ來る事
并宰相秀吉卿反間の事

巻之十七

瀧川三郎兵衛反間ゟ中る事
并三家老横死の事
内府信雄公と羽柴宰相秀吉卿再度桙楯の事
并濱松へ内府公の使者の事

巻之十八

尾藤甚右衛門尉説客の事
并片桐伊木異見の事
池田父子尾藤甚右衛門尉ゟ約束の事
并濱松の御勢御進發の事

巻之十九

中川勘右衛門尉高之我意を振ふ事
并梶川平左衛門尉正繼中川を殺ス事
池田勝入齋父子犬山を攻る事
并犬山没落清藏主戰死の事

巻之二十

池田勝入齋小牧山の邊を燒事
并森遠藤羽黒表へ出張の事
酒井左衛門尉奥平九八郎森遠藤を破る事

并野呂助左衛門尉父子戦死の事

巻之廿一

池田勝入齋稲葉入道犬山を備る事

并三遠諸士池田勢を欺く事

羽柴宰相秀吉卿大坂首途の事

并酒井左衛門尉忠次秀吉卿の軍配を知事

巻之廿二

池田勝入齋秀吉卿へ計略を勧る事

并秀吉卿勝入齋教諭の事

三好孫七郎秀次三列へ下向の事

并濃松乃智計諸将閑道を行事

巻之廿三

池田勝入齋岩崎城を乗取る事

并群鳥陣前より吉凶を告る事

三好孫七郎秀次小幡原敗走の事

并堀久太郎軍配の事

巻之廿四

堀久太郎秀政遠三の勢を追返す事

并本多彦次郎武勇の事

森武蔵守長一奥平九八郎信昌と合戦の事

并池田丹後守機変をたゝかる事

巻之廿五

森武藏守長一戰死の事
并池田丹後守圍を破る事
池田勝入齋武勇の事
并三刈の両金次郎の事

巻之廿六
片桐河合両臣勝入齋を諫むる事
并井伊万千代の事
池田勝入齋戰死の事
并片桐河合両人の事

巻之廿七
池田紀伊守之助戰死の事
并濵松御軍慮即智の事
小牧山諸手評定の事
并本多平八郎忠勝出勢の事

巻之廿八
本多平八郎忠勝砂川押の事
并永井與四郎馬を取返し事
加藤虎之助清正本多平八郎を知事
并秀吉卿両雄を論じむふ事

巻之廿九
本多水野夜討を議せる事
并羽柴方五所所伏勢の事

羽柴方三列方對陣の事
并二重堀陣夜討の事

巻之三十

後藤又兵衛高名の事
并加賀井竹ゝ鳥落城の事
秀吉卿小牧山へ書翰をおくらるゝ事
并長岡與一郎使節の事

重修真書太閤記第九編目録終

重修真書太閤記九編巻之一

柴田勝家佐久間玄蕃と呼返す事
并羽柴筑前守大垣へ進發の事

佐久間玄蕃允盛政ハ後藤又兵衛基次ゝ来山羽田退城の時刻を談を聞てめ〳〵と打笑ひ何様辨舌さくゆゝしき利害を説明したりそれハ来山羽田の侍らゝ聞ふしと實に然いあるまじきなり必竟某ゞ大岩山を打落したる勢ひ辟易して夜脱よをんと思へとも又跡を追るゝうつさる左様なる利口を申あるゝ某ゝ勢ひを以て此城を踏潰

さんと何の手間ひま入へきとうい誠に朝飯前の
仕事あるとも男道をたてて命をたゝむのと切
殺さんも罪作りうつゝに開運の前の不吉あれい云
まゝに命をい助くゝ其と洪大の恩とおもへて
早々馳返う約束の通う相違なく今夜初夜と限う
に退城とゝ但時刻いさゝうも約に違て即時
乗破るゝ此義を能々両人に申達とゝと嚴重
に陳説しけるい又兵衛承たう何とて約束の時刻
と違へ申へき其儀いさゝう御氣遣ひあるまゝ
くゝ併如是大軍をおしつめらるゝ徒然に覗うめ
てのゝ有んも余呼の人目如何あう依て晝の程い

紙玉まゝい玉おゝの鉄炮と打出ゝ申へゝ此義も
御心得ゆへゝと申けるとて玄蕃聞て都に紙玉の
玉なのゝといに鉄炮あるや北國に左様なる音
そうう兵器なゝ因て不案内のとなれい責口に付
て楯竹束と設けんも暇つふゝなう然い此方にて
も鶏の眞似をして時をうう作るゝと約束して又
兵衛と帰しけう又兵衛砦にうう来山羽田に玄
蕃う謂ゝ由と告けるい何もたゝ息と継て是と喜
ひ後藤う働と寝美ゝ夫にう持場ゝに足輕と配
めゝの如く鉄炮と打をゝとも紙玉ゆゝい玉お
しのゝと故寄手い楯も竹束も付と餘呼めたうの

化粧軍とあーたりけり賤岳うそへめくて時刻を
のそーー今や筑前守大垣こうり引返そと何もくのび
上うて待居けるわとよ堂木山の大金藤八ハ忽ち
心と變ー佐久間う方へ内通ー味方よ参るへき由
と約束しけると聞て江北の村々よ腕とさそう拳
と握るわとの郷士地侍いつもくこの足と踏て
佐久間う陣へ趣き御旗さーのを下されゆそく
御味方よ参うて軍忠をとけこいへーなんと申け
るよう玄蕃弥心とどうして江北を切平げんと
い一日二日の間よ定まるへーー然ーて帝都よ切上
うまう朝廷を此方へ行幸なー奉うそれこう綸旨

を以て山陽山陰五畿内を討平らけ天下の武将と
あらんと十日の外よ出ーと逸氣よとのうける處
へ柴田勝家の本陣中打尾山こう使者と差立早く
人数を打入然るへーー勝て深入をるハ大敗の本ふ
う筑前守う武畧いめ行ても知如く奇を以て正と
なーー正を以て奇となを進退變化自在を得ーーとた
とへハ蟄龍の雲霧よ乗をるよ似て人の意表よ出
ると其方も知ーー大垣と當所とをうよ十三里
餘の行程あれハ彼處よて大岩山の落ーと知ぬと
いるもあらーー然ハ筑前守う引返さんとも今四時
五時の間あるへーー筑前守駈付たらハ必定玄蕃允

敗北とくしゝ只今の内是非とも引返し此手と一つ
なりて合戰と丈夫に持ゆへと再三匠作のいく
度とても述しゝに不破安井徳山拜郷ありといふさ
ま老練の匠作の申されい處十全十備の軍畧と覺
えい白龍の魚服豫且の罠よりめくると申ても勝て
兜の緒と申世話も加様の処を申すゆへ然ら
ハ御人数を御引上げ御帰陣然るへくと申けき
ハ玄蕃允いふも不審けるおのゝちに大ふ
打笑ひ申けるハ匠作ハ此手の容子を見あて孫ハ
加様に申越るも道理ハ各ハ正しく此處に在
て地の理とも知人の氣とも心得ゐゝ左様に臆

病を起しめんとのくも寝おひとゆひしこふ左衛
と筑前守を怖ろと思ひあんすハ何とそ是迫
出陣しゆひしその軍の圖といふのハ分麗の間
あるのとハ面々も申て言ひ知ゆ處ふ
ふ大岩山の落しそのうさの敵を何と見む
ふそやいつもの迂支度してあるのを何とそ
只今引返とへさ筑前守ら大垣より此處へ來ゆも
何さよ四時五時の間あるへし但左ゐと早くりけ
付たくんまハ馬も人も勞とそのゝ用に立ま
さのうその勞たる処へ切めくりたらハ何に筑前
ら侍とも猛く働くとも十分の軍功ハ立まきふ

う兎角とるうちゝ中打尾山ゝう推下〳〵短兵急ゝ
攻ゐゝへ〳〵前後の敵ゝ取うとまれたらんゝゝ皆
皆の恐ろ〳〵とおのひゐゝ筑前も必定戰死うさゝ
くゝ擒ゝあるへきすてひなう何とち〳〵面々いお
のひゐゝそとあさ笑へい安井徳山不破拜郷あさ
とそて能天狗ゝ付ゝ〳〵若輩ゐの〳〵ゝ際とて
我々とあまうゝ輕侮〳〵たるゐの〳〵いひ様やと心
中ゝ深く憤ゝとも知ぬ顔つくりて推返〳〵何さま
玄蕃允のいとる〳〵あゐのしさうゝも冷〳〵く聞えて
へとも面作のいとる〳〵處い猛虎の岩ゝ憑飛鳥の
林ゝ游ゝ似て奥ゆう〳〵力あり〳〵て覺えて今一度

御思案ひて然るへ〳〵といゝゝい玄蕃允氣色とりくへ
左様ゝいとる〳〵うゝゝい匠作の下知ゝ付て軍とい
なゝゐへ何とそちの玄蕃う手〳〵い從ひゐひしそ
左る心の人達とい相伴ゐふて詮なゝひ急き中打
尾山へ引返〳〵老ゐもゐゝ匠作と共ゝ堀へなうと
も溝へゐう共落入ゐへやと苦々〳〵いとれて四
人ひとゝく一同ゝ怒うと起をといへとも匠作の
あもゐと若氣ゝとる玄蕃なう各心と添て給ゝ
といとれゝのと若ゐの〳〵如く同士軍をんも老
甲斐なゝ是い一定柴田の運の盡う處なるへ〳〵い
うゝもゝて盛政う敗軍と救ひ取でい侍の義理立

し今日も筑前馳来いひ向て戰死し匠作の恩よ
報ふへしとおのひ定め此上い玄蕃允との〳〵いと
〳〵ふ従ふへしと挨拶しけるい盛政わそ笑ひ
さも有へしと云つゝ車もあひよ床机よめ〳〵諸
軍を下知して居ける処へ前田孫四郎利長去十四
日の夜父の本陣をすて引返しぬる由と告来りしか
い盛政大音よ是手まとひの臆病武者それわそよ
けしと嘲う笑ひしを聞のいつまも玄蕃允を惡
しとおのそぬのも無うけうめる處へ勝家の
使として毛受久左衛門ゑを来うて申けるハ勝て
引負て進む共よ軍策の專要とあと處ろ是わと

の事心得めとぬ玄蕃允とのよいあらハ勝家申さ
ひとも此場い引めふへさなるよ頻うよ進うて戰
を持めふと實う危ふくい早々御帰陣あるへしと
匠作いつもう嚴敷仰らるていと申けると聞
や否盛政立上う匠作のそれわとよ老わとあふと
今ものて知さうしそや立帰う明日い都へ御馬と進
めめふへさよてハ早くその御支度となるへ軍
の事い玄蕃允よ御任をあとと申せのとハ切て
更よ久左衛門う口狀と聞も入と久左衛門まさお
しうへ兎角暇とりい内よ筑前引返し可申いそ
とよ折合て軍をんよ此處いあらくいむう元弘

の軍ゝ楠正成京都ゝう守都宮ゝ下ゝと聞て天王寺ゝと引退さゝ例ゝ御あゝひゝへゝゝと頻ゝゝ勧めゝうとも玄蕃耳ゝ聞入と複ゝもあと楠ゝも あと今日ゝ引ゝゝさ軍場ゝあゝゝ筑前ゝゝ駈付ゝ めゝゝそれゝそ忽ゝ打破ゝて猿冠者ゝ猿舞とさを んとるのゝと云て其後ゝ更ゝ取合ゝ久左衛門 もあされゝて中打尾山ゝをゝゝ此由と勝家ゝ告ゝゝゝ勝家歎息してさそも〳〵不了簡なる玄蕃允ゝふ此ゝ勝家ゝ腹切をんとの結構なるゝゝ 何とて敵と筑前とおのゝひけん今日ゝ正ゝゝ玄蕃允ゝそ我敵あと久左衛門罷向ひ是非ゝ引立来と

ゝと涙と流して言送ゝうとも盛政返事もゝゝ 然程ゝ濃州大垣ゝそゝい四月廿日未刻ゝ大岩山落城ゝ中川瀬兵衛戰死の注進到来とゝゝ筑前守使ゝ向ひいゝゝ玄蕃允ゝ直ゝ引取たるゝと問い使者玄蕃ゝ大軍ゝて其儘陣取て罷在ひと答ふる と聞と其ゝゝ立上ゝ階々と迄ふと鳴ゝ腰刀と抜て額ゝ當軍ゝゝ勝たるそおのゝひの外早ゝゝゝと やと五六度呼ゝ馬引とありける時舎人例の大鹿毛と引出ゝたゝ是ゝ明智左馬助ゝ湖と渡ゝた る名馬なゝ筑前守馬ゝ乗あゝゝ茂助ゝと呼ゝゝ けるゝゝゝ堀尾馬の前ゝ立て轡と押えゝゝゝ筑

前守別義なるべく其方の命を貫ひたしといふ茂助うつと笑ひ安き御事なり元より命とい奉り置しものと事新らしくも仰らるゝものかなと答へけるあとり筑前守然者其方大垣より留りゆへといふとれけるを聞て茂助承こうゆ氏家内膳の事なりてゆへ畏りゆと申時筑前守是一大事の役なり併其方あるべき人是と勤むとへさのなり念入よといひて皆々續けと聲の下より一散に駈出しあるべき近習外様の若めの共我も〳〵と跡を慕ふて走りけり筑前守路々我れ羽柴筑前守なり大事の所用ありて江州へ急き帰るなり追々来る我人数

幾千万あるとも申合せて食事を與へよその外馬の沓草鞋馬の秣まで用意とくゝその代物い三陪して取らるゝと觸つゝ走りるよりゆう在地の地下人原我も〳〵と食物以下を持出してこれを與えゝうい三四万よ余る軍兵一人も飢のなく夜ともいとゝ馳たりけり此時勝家い岐阜の三七殿へ使者を遣らいるゝ筑前守と喫留て江州へ帰りゆふ然らい我等江州を切平け申ゝ前よ岐阜の城つゝ後よ江州の戰勝たゝい筑前守いりよ猛しとも狼狽をんと疑ひなりとゝくを内よ我等も濃州へ發向しゆをんといひるよ

不思議あるうふ此夜大雨車軸を流しぴるゝのう
呂久江渡の両川俄に出水し使者川を渡り得ず三
七信孝勝家の使ふ〳〵とも大垣を襲ちんとて計ら
とし〳〵是も洪水に支えらるゝて手を空〳〵なりた
うひるゝのう筑前守おのひのまゝに江州へ引返
ととゝと得たり〳〵なり

甫庵太閤記に癸未卯月廿日未の刻秀吉小性
馬廻り弓鉄炮都合其勢一万五千を率し濃州大
垣を立諸鐙を合を急さあくる氣象いうある天
魔破旬も向ふへ〳〵も見へさうひる良有て堀尾
茂助い氏家内膳う心を引見んと思ひ云様い秀

吉難義の程いう〳〵思召いや又當城に御座ひて
んゆと尋ひ申といされいひ岐阜への手當を沙汰
し置某も秀吉卿の御跡をくろめひたんやうて
參陣をんとて貝をふうせのうりを出しひしめ
き合う〳〵い堀尾茂助も安堵し六人のの共
に云様い氏家り心を變しるい引付一着を極
めひへこと心腑に銘しおのひしう目出度ことみ
そひへ内膳も柳瀬へ只今趣へきとなりいさ内
膳と引つゝ參陣有へきと云ひとの〳〵悦あ
へりつゝ申の下刻に大垣を出汗馬の鞭隙な〳〵
急さまろうとあう

重修眞書太閤記九編巻之一終

重修眞書太閤記九編巻之二

長濱の郷民筑前守を迎ふる事

并丹羽五郎左衛門尉發向の事

濃州大垣城に殘されたる堀尾茂助吉晴は今年四十歳膂力既に壯に武勇世に許されしのなれば早くも筑前守の意を悟り是は氏家内膳と疑ひおのくるるよりは我一命を呉るといふ事なれば然は内膳が心中を引見ちゆとおのひ本丸に入て氏家に面會を堀尾と見てのうに茂助との御遣は筑前殿の御方より十二の者なるに何とて爰に殘

かなひしを然ハ此内膳と二心のものと思されく
か柳某と稲葉安藤ハ當國の三人衆といはれしが
のなるか我等が父すでにト全斎藤龍興を疎ミ總
見院殿に従ひ参らせしより以来二心なく仕奉り
父ハ長嶋の軍に命を棄られ倅そのちなみを云ハ
筑前殿はまた木下藤吉郎といはれし時厚く取持
をなし舊好あり何とて腹黒あることをハなさん
さそといふ茂助是を聞て何様氏家殿と稲葉安藤
両家ハ當國の名家なり何事にもおぼし思立なんと
のおもはん時誰かハ下知を背き可申然ハ筑前守も
氏家殿をハ何程かおそろしきものに思ひ居はか

り但筑前も今度の軍ハ能々難義の合戦なるべく
覺ゆ氏家殿ハ何とおぼしめしはやらんと問ハ内
膳答て申様如何にも筑前守殿難義の合戦ならん
とハ誰々も申べくはそれハ只今まての如く織田
殿おはしまつる代と見ての下墨なり織田殿を
てに滅びたまへり天下の主といふものいまだ定ま
らんハ柴田ハ織田殿の家老なれども我意はなく然
も己が勇氣に慢じて人を人ともおもはずその上
に嫉妬深く何々以て天下の武将たるべき器量に
あらずハ其甥の佐久間玄蕃允また勝家に劣らず偏
執はなし其上に諸将に無禮あるをもつてゆかりも

玄番を疎み勝家を輕み又織田殿の御子なれとも三七殿武勇を好まれい計すて文事なく禮義を弁へあるこない御父右府のたゆる大忠功を立たる羽柴殿と柴田と同し樣なあるこれ却て柴田ゝ申ゝ付て筑前守殿を討るあさんと企てゝ偏ゝ天魔の所業とおもえい丹羽五郎左衛門い思慮深さものなれ共小量ゝて大器なあるゝ瀧川い邪智深く人を知の眼ゝなければ國二つとも治むへるゝ筑前殿い五畿内大ゝ御領知のゝへゝ近江國と播磨美作備前備中備後ゝて御手ゝ屬したりゝ然い今ゝ後天下を切從へゝゝい筑前守殿ゝあらんゝ誰ゝあるへき某ゝとも舊好なれい定めて思召忘れあるこない此城ゝあるゝて岐阜を押えゝこい仰らゝなれとも呂久江渡の洪水六日七日ゝ落ゝと見へゝ然らい岐阜ゝ軍兵を出せとも急々ゝよい叶ふへゝゝ因て徒然ゝ當城ゝ在て岐阜を押えんゝ賤ゝ嶽へ馳向ひ筑前殿ゝ手を合をんと思ふなゝゝ螺を吹立て人数を集め幟を取出し旗指物をとゝし手配をなし打立ひるゝと見て淺助大ゝ悦ひ嗚呼命一つ捨ひたゝ内膳殿のゝ變心を生し岐阜と一所ゝあらをゝひゝい御邊と引組差違んと思ひしゝ此御容

子なりしに最早浅助う命をそつるよ及そふと云て大よ笑い内膳聞ていらさよ此時節なう筑前守殿の疑をれしも最あう去なるる前よも申如く今よう後天下の大将となる給ふへき筑前守殿を敵とする身の程しらぬ多くあるへうふ去い賤ヶ嶽へ出るわとの侍の中よ誠よ柴田と共よ死生を同しくをんとおのよめの幾許もあらし前田父子金森佐々なと決て裏切しく筑前守殿と一りよなるへきなう見あへや堀尾殿といひなるる馬よ打のう申の下刻よ大垣を打立江州さして馳向ふ筑前守殿の大垣を立あひしい未の下刻なう至村と

藤川との間よ至うあふころの大鹿毛を乗倒し あふこの道をのうよ五里餘よ過ひ名譽の駿馬ふとともいうるらしひん膝を折て臥しとなうその時日をてよ暮よ及ひたるよ春照野の稱名寺といへる門徒平日筑前守の顧を請けるる是時節御迎よ参らていあしかりぬへしとて菓子を持参し慰め奉う馬を求出して御供申けるよう筑前守大喜ひ事平さし後寺領あまさ寄らさしとうや又長濱い筑前守久しく在城あうし処なれい地下人とも年ころの恩義を忘さを近隣を催促し松明と幾千万となる山々峯々をとうをさ間あさ迫

燈一つ点て大将の御迎へと出立ゐとる大垣街道のあるるさと白晝の如くされい是とたゝうと
しと酉刻ばかりに大将木の本より馳付地藏堂の廣
庭より下立て暫時休息ゐとゐとゐ追々ようけ者
二万より近き軍勢一人も恙なく馳集るさの車長濱
の町人ともの催促ようて聞えしうへ筑前守天
下を治めゐ最初より長濱の町人の屋敷地諸役免除
しゐひしなり去程お筑前守の小性馬廻り弓鉄の衆
まて一人も残らず悉く馳著たるしうへまつ味方
の砦々より籠るものの共より力を付んため木本の浪人
美濃部勘左衛門とゆふ者を召出され酉下刻の暮

まるさとより此邉の地下人ともを田上山より上らをて
鯨波の聲を揚さをるる折節筒井の家老島左近此
處へ御迎として罷出神速の御出馬いつもの御軍
畧とい申ゐるうへ此度の御作畧ハ別して感心仕り
い恐ある申条なれとも異國の孔明我朝の楠と申
共勿々ハて及ひうとくいと言上をしうへ筑前守
との外悦ひ何さまとゐとの機密ハ其方なるて
知あるまてさなり追付勝関と揚へさといそけい
そげと下知しゐへい左近ハ筒井う陣所へ走帰う
その近邉の砦々へ大将御著ありし由と觸たりけ
とハ只今中て開退くゆとおのひしのの共いつも

もいつまも勢とまり越前勢と打破りて大将の御感に預らんとひしめきあへり取分賤岳へい忍ひよりふとしのを以て只今木本へ着陣したりゆうて北國勢と追討まうつつさなりと仰遣さる佐久間玄蕃允い夜に入ふい賤う嶽を請取んと深々と寄て陣を取しとなれい後より筑前守の大軍押寄しとを知といとも急に引返せへさともあしうたく只つゝぬ休ひて威風をふるひ備へまう此時丹羽五郎左衛門尉長秀ハ若州并に江州二郡を領し坂木に在城したりしるう日頃心を筑前守に寄たりしうハ越前勢と襲いたりあとおのひ嫡子長重

に軍兵三千人をさし添敦賀口へ出張をしむ是いハ北國武士の後を断んとの計畧なり又塩津海津ハも七千人を伏置たり然るに四月十七日羽柴筑前守美濃路へ出張の由を聞さてい賤岳邊の砦々に籠る所の兵士等ハ上も心元なしとて家臣坂井與右衛門江口三郎兵衛望月文九郎以下小性馬廻り千餘人を召連酒肴多く用意し船五六艘に取乗且陣見舞且ハ加勢の心にて同しく廿日に出陣しけるに鉄炮の音嚴しく湖上に響さとうける故船屋形に登り遠目鏡を以て見とさに賤岳のうとにあまう旗馬印おひたゝしく立騒さけり長秀お

のゝ様是い北國勢羽柴方の砦を責落し其競ひゝ
外々の砦へ向ふと覺えさう急き船を河へ付ると
下知しけるい坂井與右衛門江口三郎兵衛太田小
源太承らういふも御諚の如くなるへく急き坂
本へ漕返し堅固ゝ御籠城然るへくしと諫しうい
長秀聞てされいとゝ弓矢取い名をおそれおしめ身
の成行い朝夕をよくこゝ名い百年の後ゝ傳とう苔
の下まて朽ぬのなう筑前う難義の軍とゝ迫
出陣したゝい定うゝ知なうう坂本へ引返し籠城
したゝい長秀う弓矢い長く棄るへく海津へ遣し
置たる勢と三川ゝ分て一分い海津ゝ殘し二分

い賤岳へ參るへく溝口金右衛門秀勝村瀬次郎右
衛門能朝も來るへくと書狀を認め判形して船を
押戻し急けくと下知しけるい使ゝ立て望月文九
郎御意ゝいへとも五里漕戻して勢を調へまと
五里の路を漕返うけて只今の役ゝ立けるとい
申けるい長秀いやとも軍ゝい期の延るといふと
あう長秀賤岳へ加勢と聞あゝい定めて大勢あう
んと思ひ寄手ゝ猶豫の心有へく五里往還しても
間ゝ合へきなういそけやくと下知して船を押返
させ其身い汀とさして早めけう
後藤又兵衛基次賤岳を保る事

并北國勢騒動周章の事

去程に丹羽五郎左衛門尉長秀へ船を渚へ付賤岳へと押行所に味方と覺しき武士十人許手負を助けて來るを見付長秀聲うけ誰と問彼者共長秀を見知たるゆゑ畏り是い中ノ瀬兵衛尉う手の者に

ひ今曉大岩山越前勢の為に攻拔き瀬兵衛尉亂軍のうちに戰死しその〳〵ち高山殿へ砦を棄て落らしひ間賤岳とうち〳〵め砦々いつとも持こたえ難く落支度の〳〵いさされひと答ふ五郎左衛門尉おと聞賤岳の加勢と〳〵て丹羽五郎左衛門尉只今參う著たりとの〳〵安堵しへと觸さとしわとに砦

砦の軍兵とも色と直して丹羽う加勢の入城を待居たりけり翌日廿一日大澤村より筑前守賤岳へ上らるとける時五郎左衛門尉へ大音村より賤岳へ上う坂中にて筑前守に面會あるひとい秀吉長秀の加勢と厚く悦られけり此とも知ひ佐久間玄蕃允い賤岳城中へ使者と立日既に黄昏に及ぶ早早城を渡しひへと言遣ち城受取の役人夫々城際へひしひと寄付けるとい城中以の外に周章し如何さんと狼狽しけると見て後藤又兵衛使者に對面し只今開城退出仕いと挨拶して使者を返し其後城中を走廻う書の程に紙玉こめし化粧軍あと

今こういと真よ玉とをめて打拂へゆと下知しける
ふよう何も畏りぬと答へ〳〵強藥を以てこめ替〳〵
打ひとよ城受取の役人共散々よ打倒されたり来
山羽田おい何故と仰天とると又兵衛あさ笑ひ城
と渡さんと言しい今宵一夜を延さんまての謀ふ
ア夜陰の城責うあふまひとい佐久間いうよ猛
しとも自然よ引退て夜の明るを待ふうん夜明ふ
い筑前守殿必定駈付ふへ〳〵若又玄蕃怒て夜と
もいとく責うらいあれと討んと左安うる〳〵
左ふと驚く事うらと云て猶足輕よ下知し頻うよ
打とひるうつうう玄蕃う侍よ大崎六郎といふめの

城際よ立顯とし何故ふ約束を違へらるゝと其儀
ふうふい只今城乗し微塵よなるさんと訌うひると聞
又兵衛矢倉う自身よ鉄炮を取火蓋を切い誤を
大崎う咽輪の外よを打拔ぬとい二言といとひ死
しとひう玄蕃允いふしを見ていく其義なうい只
一のうよ踏つふをと獅子奮迅の怒りをなして進
うひるを拜郷五左衛門馳來う後藤又兵衛とゆら
んよ欺よしとの口惜さ去なうう夜陰の城責い敗
軍の基なう今暫時休みへゆと諫めひるふう玄
蕃もふふ塩とゆおのひひん攻口をいさうう引退
さ樹陰を便うよ屯をう来山羽田い既よ引退て落

行んとせしに寄手の引退くを見て又立返り又兵衛に如何をんとするぞと問ける時又兵衛少も騒うゝ夜陰の城責延なゝい必定未明に寄来るべゝその頃城中にて一時にゝゝゆゝゝ筑前守殿とゝ
び五郎左衛門尉の加勢到着をゝさなりたりうの
問あり待遠ゝとも堪えるべゝやと諫めける又中打
尾山の柴田勝家い佐久間の体と心元なゝ思ひ我
身も今市村と東野村との間狐塚といふ處へ陣を
移ゝ玄蕃に是非とも爰まで引ひへと使を立ける
處に玄蕃う陣中うて誰といなゝに筑前守の先鋒
とや馳付たりと言出ゝ上へと下へと周章ひ拜郷五

左衛門い賤岳の城中にて頻うに関を作り螺を鳴
ゝ勢書の程に引替うゝ体に驚き見渡せい何の砦
にても同ゝ関を合を螺を吹是い何さに只事か
らゝとおのひ玄蕃う陣中へ駈來う夜曉のに急
き城と攻拔べゝと手配となりけるに兎角陣中の
雑説静にゝゝ筑前守の勢五万といひ六七万とい
ふわとに峯々谷々松明なりゝぬ處もかゝ玄蕃い大
嘖對馬守と呼出ゝあの松明い何のそとや見て
參れと下知ひしに大嘖承たり駈出ひ猶も心元
かゝや思ひひん今井角次郎にも參りひへと下知
ひにに両人蜂ケ峯筋と下り黒田村の観音

峠と下立南の方と見渡せばさすがに東西の山谷峯々幾千萬といふ数もまだ明松明の光り照輝くその上木の本邊ふうして此邊まで人馬の馳違ふ音あひたゝ〳〵聞えけるまう両人急き取て返し此由を玄蕃に告げ玄蕃も案に相違をし筑前守の軍略に仰天し然り味方の一大事となりにけり口惜や後藤又兵衛とやらんに欺かれて時刻を延しいとゝ安うらう彼夜に入て城を渡せといひしに筑前守う來者の期を知ての事なるべし何さま猿冠者といへども木下藤吉郎その身の品なれば因さりけりあく迫智恵のたけし男うあるを程の

人数あるべしとは思へれども正しく松明の数そこに何なる計策ありの計知へうもなく然い宵の程筑前守の勢只今著をしなのとのひさをしも筑前守う忍ひの者入こであるうも知うし苑ふも角ふも此處い足場あゝ人数を清水谷の峠に引あけ備を立んとひしめけい原彦次郎安井右近をして七百余人を率ひ後殿の事を用意をしむ嗚呼玄蕃血氣にそのう敵を輕んして此大敗に及ぶと天時の然らしむる處といふ云なうう筑前守の高運のいさい處と知へきなう羨に筑前守い美濃部勘右

衛門と呼て此邊ふ近道やあると尋ねへ畏りと
て樵夫ふ向知人もあさ山道を案内し奉りける
ふろう観音峠のあるへ推あるして六七千許も
備を立ひ黒鍬の者とめし出され茶臼山の尾崎
を堀切をゐへい忽ふ深さ一丈余口二丈ぐらりの
大堀を設けゐふその作事の神速あると實ふ人間
業といあのくれぞ筑前守い狹箱ふ尻をうけ黒鍬
とものの働を見物して居ゐふ由と聞とす丹羽五
郎左衛門尉長秀山梨坂ふう賤嶽の東南へ押廻し
木を敲き石をゐひ火の手を揚て関を作りく寄し
りともつとさと鉄炮をい放たしめ是い夜陰の翻

玉おやまつて人を傷らんとと恐危てなう此時玄蕃允漸清水
谷の峠をこうして備を立直さんとて一處ふ丹羽五郎左衛門尉
長秀の人数をゐ前途を取さうそ関の聲山谷を響うて南へ
廻り後の方ふうい羽柴筑前守の勢湖の涌如く野ゐも山ゐも
滿々たれい砦々ふい龍の雲を淳虎の風を起をしおのひとふ
して関を作り螺を鳴をとと百千の雷霆ふ異ふくく玄蕃ふ兵
共大ふ周章して騒動ふのなくく然ふう安井左近真先
ふ人数を引上しふい跡ふのとうく原彦次郎只二人鉄炮弓
鎗を三方へ引分其身中軍ふ備えそ引退北國勢の中ふく
奇代の勇士やと褒めのものもなうりけり又玄蕃允ふ拜御
五左衛門呼て引後ふたる人数をすとめんとをとると見

て丹羽五郎左衛門今いまと時節あらんを上鉄炮を打かけ
ると下知して足輕をそこめ頻に打とをくの北國勢とうと
崩と立谷に落崖に轉ふのの其数をしらず攻むるい長
秀なほ進退の度を量ると老練の精兵なれい原拜郷も進
む時い五郎左衛門兵をのとめてこれを追ひ切ふく
扣て筒先をそろへあれと撃原拜郷引退くとそれい螺を
吹揩をたゝきておもを追ふ丹羽の勢の中ゆも坂井江吾溝
口村上いつもの名を得ゝ侍るれば塩合を計りて鉄炮を打
り打かけをり攻かけると見く砦々らうも人数を出して峯
峯尾崎〳〵に馳〳〵り鉄炮をうるくとをの〳〵打かけ〳〵
い玄蕃允原拜郷と近付いるる両人い北國すて名を得ゝの

のいのるに此敵をうわと近くるをゝとの口惜〳〵日頃の
勇氣い如何をゝあらんとのくい五郎左衛門これいい御存の
如くうゆそい某ら人数をうう三十間四十間のうちくい敵を寄
付ひひ〳〵今日めくの如く敵に近付らゝゝこと我等う
運の末とおわそひ此上い銘々命を棄る時節をひへゝそ
追拂て大将一人落〳〵申へゝと云のう早く鎗を振て群うる
勢の中へ突て入あるると幸に狂ひ廻りける有様狂象の山
と裂に似て目覺〳〵見そうるとる上方勢い雲霞の如
く入替〳〵山ゆも谷ゆも充満をゝおよう玄蕃允自身と手を下ゝ
カと盡〳〵人数と引上んとあるとをいくとも崩とうる味方
の勢をあ〳〵隔てゝを殊に土地の形勢あ〳〵ゝて踏止るく

くもわ〳〵賤岳の北飯浦坂の南より小高き峯あるを見て
あら〳〵おそれ備を立んと下知しけるに徳山五兵衛手勢を
めつれて高き〳〵に立悔へしうとも如何ふも叶ふへ
くも見えさうしうに僅に其身計切抜てうし〳〵北庄へ引返
に金森五郎八入道いらるてのうち筑前守の軍立よのつるあう
に必定末代の大将軍と見さうしうに如何ふもして此人
に従て大功を立まゝおもへとも北國まで柴田の寄騎とふと
以て今度も出陣をしあるとい實に柴田に従てんともおも
そに能わとに軍して是も同〳〵人数を引上てう

重修眞書太閤記九編巻之二終

重修眞書太閤記九編巻之三

羽柴殿賤嶽へ乗付ふの事
并序破急陣螺の事

去程に北國勢をそこ敗北の色を顯らしけるい筑
前守の旗本馬廻り小性の勇士等是を見て去い馳
様りて追崩さんとひしめきけるを筑前守のさく
制して進まるめに其方共そやるこなうと十う十
我手に入し越前勢ふう今をこそ見合あい柴田に
疎さのの大形落去りて親しさのの計と成ふんと
さ押様りて皆殺にをくべしと下知しあへい加藤虎

之助福嶋市松正則敵足場ゝゝ退備を立めゝ
めゝゝ攻るも骨折申ゝ軍いのまゝ備えさる
よ利あらゝ兼々仰らるゝめのと早總うゝよ拭
う追崩しゝんと逸り切て申けるゝ筑前守聞て
莞尓と笑ひ其方共う骨折つゝといさそ羽柴筑前守
といそるゝなゝ遅く共今日中よゝ我手よ入つゝ
めのを一時二時ゝゝ取たりとて其方ともを勞
らゝて何うとん今暫時待ゝへ我をゝ猿といよそ
ゝ秋のさの實の熟て自と落る時節を能しとう
我よ任をて休息ゝ腰兵糧ゝ遣ひ氣をのそゝ若の
の共といそれゝゝゝ何も木根岩稜よ尻うち拭て

割子と開き岩間の水よ咽とうるゝゝ北國勢の進
退と見物をうゝあうて筑前守左右と顧こいそ
ゝ我馬印とあの玄蕃う陣の後なる峯よ廻をゝと
下知ゝゝゝゝゝ畏ゝといらゝゝゝて直よ金の瓢簞の
大馬印と峯通ゝよ押うさゝ差圖の處よ立たりけ
る折節筑前守茶と喫そゝと尋らるゝゝ陣中茶の
用意あゝ如何そゝへさと見る処よ長濱の百性大よ
當りて堀と堀けるのゝ中よ竹筒を腰よさゝた
るありそれゝ何そと尋ねゝゝゝ茶よそいとゝゝも
あゝゝ天目よなゝとそさそされと飲筑前守見
ゝよて其茶をとれよ與うと宣ふよう福嶋市松

おれと取次んと其男の側へ立寄けるに其男おそれ
へ餘りに勿体なしと辭退しけるを市松更に聞入
ずこれを持來りて筑前守の前に畏まり筑前守自
身に竹の筒より天目に移し一口是を飲みに茶
にあらず酒なりしに是は一段のさ茶なり銘
茶銘茶と舌打しつゝ快げに三盃を傾け褒美い
後に沙汰をなすべしと宣ひながら其筒と天目を市松
に返しあくまで市松これを取その筒の臭を聞に酒
の香いまだとゝもなくの一滴もなかりけり後日此
男に黄金三枚賜はりしとある折節德永石見守參
上し伊賀守事去十二日死去をし由を言上しける

に筑前守何ともいはれて聞ぬおのれ居ま
ひしとうや石見守悪く謂てけりと思へる顔色し
て退さけり去程に越前勢崩れとなり上下騒亂を
しわとる宗徒の大名の内なる一戰に及ばれ引
退らしを見て總軍浮足になりて騒き立ける處に
玄蕃の陣の上の峯に金瓢簞の大馬印をさしあさ
しげるに折しも廿日の月に照合てきらめきて
うしと見てそれ筑前守是まで寄てけりと侍も雑
兵も一同に狼狽とるに限り筑前守なるに此
体を見付たる有て螺と持來りて宣ふに近
習の侍螺をとりけるに取て螺に序破急の吹様

あう若き兵士い序の螺を以て進え破の螺うを鎗と合せ急の螺すて戰ふとあめくともそれい僻事ゑ秀吉若き時遠州の松下う家ゑありて今川家の螺を習ひたり是いう俊入道の法則と聞て俊筑紫ゑ下向して漂流の唐人三官といひしのう傳たりしとなり抑序の螺といふい緩ゆうゑのりくとたとへい柳の枝の風ゑ當りて音ふさとくく吹へしさの序の螺すていい春の夜の短うき夢と驚う秋の長き夜の寢覺と誘ふて兵士を起出して出立しむるを專と吹へし破といふい松と嵐の音信るう如く颯々とけく吹へし是い寢あひ之

若者あるひい勞ふしたる老武者の氣を發さしむるためなれい物具して鎗を執弓の絃をくひしあを手筈と知へし急といふい懸う口の螺なうたとへい磯打浪のおしい寄ていさつと引引とさい一丈も二丈も高く打あひていい渚をあくひまさ引うくしていい山となを勢と知へし然い此螺すていい敵の地を我地とおし我地を敵の地と見あをへしと云う是その進退の機をさしたる習ひと知へし今日の軍い窮鼠うくりて猫をうむ安さゑ似て大ゑ難く六ケ敷軍ゑう筑前守を勝しむるも負さしむるも皆是其方共の力なう但筑前ありての其方達ゑ其方

達う骨折て筑前とこのことをなれい能々勉て過を
お天下を取も其方達を大名ゑをんと思へいなう其方
達なくて筑前一人生なりとも何うをんといひか
ゝ佐久間う陣を見こゝさ時い今を夫ゆゝとと
いふふのう早く螺を取て急を吹ゆへい今迫息とつ
め拳を握う敵を白眼て扣居さる小性馬廻うの若
りの輩砂石を飛して駈出しゆとも陣門狭けをい
大勢一度ゑ出うゝ第一番へ石川兵助貞友第二
番ゑ加藤虎之助第三番ゑ福嶋市松第四番ゑ櫻井
左吉第五番ゑ加藤孫六第六番伊木半七第七番糟
屋助左衛門第八番脇坂甚内第九番渡邊勘兵衛第

十番片桐助作平野九右衛門平野權平潮の満大浪
の寄る如くちとも擬議をひ走ゆゝる中ゑも石川
兵助と平野九右衛門い長刀を以て駈向ひけるを
見て平野權平今日い鎗を以て第一とゝへ〜長刀
い利あるゑとのひうとも九右衛門更ゑ聞も
入を水車ゑ廻して真先ゑ進ゝたう此時修理少進
勝家い狐塚ゑ屯して堀久太郎小川土佐守う砦を
おさへ先手の勝軍をまかとて早々引上ゆへと
玄番う許へ使を立て頻うゑ是を呼ゝうとも玄番
聞入を勝家老たうと云て取合さる由を聞此上い
是非ゑ及ゝ有無の一戰をなゝへゝと思案を定

め二万に余る旗本勢の手配となりける折節筑前守の吹螺と聞てあれい尋常のものに吹螺はあらじ正しく猿めと覺ゆるを後とさり進めわれくとを立ける時羽柴方の砦〳〵震動して鯨波の聲を合を螺を吹立るゆへ北越の軍勢さそなを筑前守あらまを駈付〳〵と覺えたれいなとされい並々の敵よあらじ容易く思ひ侮とりたりい騰をりむ後悔あるべくと二人疑へい三人あやふとけるよりう我一陣に進はんとはいふ人もなり勝家も猥うよりう〳〵い總敗軍に及ふへく暫時見合然るへくと諸手を下知して進めは實あるうなる疑い敗北の

兆といふこと北越の兵權一時に碎うとて勝家の身を亡とに至る筑前守の開運の天時といふものの残念なりける次第なり又賤岳の峯筋へ向ひける柴田三左衛門勝政い三千余騎して一陣と守う堀切と前にあてう敵と押え居たりしう筑前守の大軍の押來るを見て味方の諸陣さそを出し兄玄蕃う一万六千の軍勢漸々に賤岳の北なる山へ引上し時勝政い餘吾の湖邊と上う來る敵兵に向て陣を立んとなりけ處へ玄蕃う使を立て我勢い是まて無難に引退きたり其方の人數とも早々引上て一所に備を立ひへとまをうに喚迎へしう

共勝政おのゝ様爰を引退んとせい却て敵を追撃
らと見苦しき目あんも口惜うるへしとて
ひ切承そうぬと返答して使を返し其身い猶も敵
を向ひ味方と静めて扣たりとそ

七本鎗三振刀の事

并拜卿五左衛門退口の事

爰も玄蕃允い志津嶽の北なる山上へ引上り余語
の湖邊をゝう押上る敵を押へなゝう三左衛門方へ
我勢いとゝも立固めたり急き是まて引取ひへと使
者度々を及ひしゝうい去い玄蕃允と一手をあらん
とせしゝ所を筑前守夜の明るを待うゝ木の本をな

たゝの暗きを押出し賤岳の南を旗幟を立させう
を弓鉄炮の衆を堀切のあるさなる勢い只今引取
と見へしゝを急き走う付打るゝと使者母衣の者を
以てのたをゝうい心得ひと申もそひひしゝと
引付堀切をゝう引上ひと覘ひをまゝ打をしゝうい時
の間を手負二百余人を及つゝう敵い此手負を退ん
とせしゝをとを隊伍をゝを右往左往あるを筑前守急
度見て小性共をゝうゝを法度をゆるをそ引付て
手柄ををゝのと身を捫下知しゝをへいのつをも獅
子奮迅の勢をゝして進みけゝう山路将監正國い清
水谷を於て一支をゝをえをゝのとおのひ鎗を打ゝう

味方といさめ山路将監正國あるをと名乗りけて敵とあつ處へ加藤虎之助清正こゝり來るを拜郷五左衛門う鉄炮頭戸波隼人つとうけ寄て鑓を打ふり只一突ゝと突うる清正あれと見て邪魔なるを罷う退けとひしさま戸波う腰の番と突けるよりう馬より動と落あつ正い清正走寄て首を取ふり仰さ山路う立たると見るよりも返忠をゝ山路将監遁とゝと突うゝる山路い柄一丈穂長の鎗を握い清正い例の青貝柄の片鎌ゝて志ゝい互ひ突合けるう山路いつも請身よなると以て鑓ゝて勝めゝとゝや思ひけん山路飛ゝさう組て勝負をと

んといひけると聞て清正いうゝも組ゝとゝよゝう早く鑓投とて無手と組生捕ゝをんと揉合けるう山路い今年三十八歳北國ゝ聞えゝ大剛のの清正い廿三歳勢長く骨太ゝ正國心よりのゝ様我い返忠をゝのなう生捕とてい憂目見んと疑ひあゝ何とゝも会を最期とれのひ定め捻倒さんと身を入とい清正い是非ゝ生捕う返う忠のの見懲ゝをんと押合揉合けるう清正力勝うて山路と組伏膝ゝ引敷ける時正國もさる剛の者ゝとい清正の草摺とつうんてちとも放さゝ清正ゝ刀を抜をゝと心搆ゝたう清正うゝてい生捕ゝゝ

〳〵去い首と掻んとなりける所ゑ清正ゑ兜の鞠躅躅の枝ゑ〳〵引ともゑ放ゑと正國得さうとくゑ返さんとなりける足と蹈損り岸ゑり下へ身ゑ轉ひ雙手ゑ清正の草摺と掻んて落下る清正手そゆ〳〵忍ひの緒と引切い兜ハ躅躅の根ゑめうゑ清正い正國ゑ引ゑて二三十間ゑろひ〳〵ゑとも終ゑ正國と捕て押え首と掻落り元の処へ立帰う兜と着なをとも進てうとさけるゑ爰ゑ石川兵助ハ三振刀の一人なれい敵多く討留たれとも雑兵ゑとい首と取ひ鼻と殺て袋ゑ入能敵のゆと四方と見渡と折〳〵もあゑ越前の勇士安井右近ゑ弟同苗

四郎五郎大身の鑓と打ゑり〳〵石川ゑ突てめるる兵助ゑ太刀打の名人なう四郎五郎ゑ〳〵出と穂先とういく〳〵りと付入て馬手の腕と きゑ〳〵ゑ切い四郎五郎鑓取落り俯〳〵處とたゝこうけ左の眉尾ゑり頷の下まて切下られてとふと俯と押えて首と取〳〵ゑとも疵ある首なれい心ゑ〳〵ゑ猶も敵と追討んと進と行處ゑ拜郷五左衛門と見付て兵助聲ゑけさなる〳〵も後と見とるのゑゑ返〳〵もと呼ゑ〳〵とい拜郷ゑり返り是ハ加州大聖寺の城主拜郷五左衛門久盈ゑうとゆひさま素鑓と以て突ゑる兵助い太刀と以て切ゑゑ

切まくり戰ふかと見ふ五左衛門も今日の限の軍なり何
うに命とおしむへき開きの退つ一合一離水の月
の影ふらく波間の鳥の浮つ沈らつ習練の達人一
交もさに戰ふたりめくる處へ拜郷ゝ家來十五六
人取てうへ前後ろ鎗を入けるとうり五左衛
門い其場を引て退さぬ残るい石川兵助只一人多
勢と引受切結ひ六七人を切伏その身も深手を負
しうい紅に染たる太刀を握りなうら片岸の下ふ
倒るとふと拜郷ゝ郎等い主の行末の心元なさに打
棄て引退たり加藤虎之助清正福嶋市松正則い北
國の大勢を突ふびけ切拂ひ猶もさ敵を討んと

ゆをさけるを兵助さつと見付いうに虎之助市松
ふるゝ某い深手負ぬゝていい叶ふへくゝと聲
うけをれい両人立止うて兵助ゝ手い浅さそとい
ひつゝ必抱しつるとも次第に弱うて既に命終を
んと見つけるゝ両眼を活と見開き嗚呼仕合ふる
うゝ命の際に其方両人に逢しこと第一番に切死い
石川兵助と大將の前に披露して給と言さし息い
その儘絶たりけりさて有へきなあゝ孫い兵助ゝ
死骸と仮初に打めくし印と立崩とやりし越前勢
と猶追掛て進こけるに白檀ゝうきの滑皮の具足
の草摺と赤白一枚交に縅し天衝の前立打たる嗔

と著庭戸濱の西北まで戰ふ武者あり福嶋市松と
ゆゝしく見付おれおそ例の拜郷と脫とすゝと近い
き拜郷五左衛門と見てい一鑓參ると聲の下より
突出し鑓の穂先の稻妻と目ぐるく間もあらいと
そ一呼一吸をゝと拂つゝうつ追合けるゝ五
左衛門市松の鎗と請損ゝ尻居とうと倒とけれ
い正則そうさし走ゆゝうて首と取鳴呼おしひゝか
拜郷五左衛門久盈生年三十五歳身い北國と生立
て武功とあらいゝ屍い余吾の湖邊と朽とても名
い後の世と傳とゝれう正則い名譽の軍ゝてけうと
勇ましゝんて戰ひけう

拜郷五左衛門久盈の長男治大夫後丹羽長重と
仕ふと云
甫菴本と原彦次郎安井左近後殿い鉄炮十挺弓五六挺
つゝ一所ゝゝふと置是とて引取下知次第とゝと有ゝ
うゝも敵をさ間なゝゝ引付ゝゝ來て弓とたと引ぬ
る計と急なりけう原と安井と立ゝうゝ後殿をゝと
堅約ゝて二度い左も侍とゝもこゝさ後殿と有け
ん安井い引取て退ゝゝる原一人ゝて前後と目とく
ゝう左右と下知ゝ退ゝゝ青木勘七郎原勘兵衛長井
五郎右衛門豊嶋猪兵衛鷲見深次郎鷲津九藏毛屋
新内ゝと引返ゝゝ突倒ゝ突退けゝるゝと原う勢と

い敵もそこそこうしとなり又柴田三左衛門尉の手へ石川兵助真先に進らけるに福嶋市松加藤虎之助同孫六平野權平脇坂甚内糟屋助左衛門片桐助作あと引付したひしなり佐久間玄蕃い拜卿五左衛門と呼先手危ふく見ゆるを能そうくひひへと云しうい引へき所と不引して如斯成来う今更計ひう成ののとおのひしくう共面もふびに引歸けるべ浅井吉兵衛尉山路将監菅屋七左衛門尉も共に帰しに合をしうい拜卿真先に鑓を打こむと等しく石川兵助と名乗出鑓と合を戰ひう共終に戰死しぬ渡邊勘兵尉浅井喜八郎淺野日向守堀切と跡に見あしに嶺にこと追立行に加藤虎之助同孫六

彼十人計の小性衆あいしに聲と上をこやとあくを以追立行るとい吉兵衛尉將監も余語の方なる谷へ心さい様に見るあいか渡邊勘兵衛浅井喜八郎見知たるそと詞とりけしういこでろえたりといひつ鑓と以て向てんとをしう如何したりけん二人共谷へ落まろひしと麓にあしに大垣金右衛門り手へ討捕しなり柴田三左衛門尉い是をもこさい手負とも打こひ二十町こうり引取けるに秀吉卿の小性衆ひこと付て追行所に前田又左衛門尉茂山の麓高き処ふ二千余の勢と二段に備へ有しと便りとし佐久間久右衛門にくる味方と左右にあしに分踏止りうまくし

う程あり〜なり玄蕃允今日の軍いとうへうちか
るへくそと大の眼りよ角を立下知しける處よ原彦
次郎進と出我々い左様よ存をさりしなり今日の
軍いひうへゆ〜程敵の勢いいるる〜重ありて厚くなり
味方の勢い見るうちよ裏崩ととくくひ願ちく
ハ只今一合戦ひへて先ハ十万騎ありと云共某さい
き申へくひといふとあり

重修眞書太閤記九編巻之三終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan